

# 人新世の記号論

Semiotics of the Anthropocene: Eschatology disguised as Science?

高岡 洋 (京都府立大学 文芸学研究所 教授)  
第42回日本記号学会大会 (福手門学院大学) 2022年9月17日 (土)

## 人新世の記号論

- ① 「人新世」という記号
- ② 時空間と想像力
  - ・地質時代の命名、大量絶滅
  - ・「沖積世 Alluvium」「完新世 Holocene」「人新世 Anthropocene」
  - ・スピノザ『エチカ』定理35 注解
- ③ 「裁きの日に近い」
  - ・ターニン『気候変動の真実』
  - ・ロマン主義/終末論から真のポストヒューマンへ

### ● 「人新世」という記号

本発表の趣旨は、「人新世」——人類の文明活動が地質学レベルの影響をもたらしているという前提に基づく時代認識——の中で、記号論が占めるべき新たな役割について考察するものではない。むしろ、そうした思考パターンから距離を取ることを試みる。「そうした思考パターン」とは何か？ それを考えるために、まず次のような事実注目することから出発したい。

「人新世における……の役割(意義、可能性、等々)」というタイプの発話においては、「人新世」は既存の事実、万人が認めるべき状況として語られる。「人新世」は一種の呪文=マジックワードとして、特定のタイプの語りを導く力を持つ。たとえば、ベストセラーになった齊藤幸平『人新世の資本論』では、「人新世」は終始一貫して自明の状況として前提されており、「人新世」それ自体について考察されることは一度もない。「人新世」を前提して議論する他の多くの言説もまた同様である。それらが広く読まれていることは、その種の語りに共感し支持する多数の読者が存在することを意味している。

「人新世」について語り、それを受容することは、一つの言語行為(speech act)である。この言葉を使うことで、私たちはある人類共通の課題に直面していることを認めるように、暗黙のうちに要求されているのだ。確かに「人新世における……」は、雑誌の特集タイトルやシンポジウムのテーマとしておさまりのいいフレーズであり、好んで使用されている。それは「現代における……」とか「晩期資本主義における……」「ポストコロナにおける……」等々と同様、議論のためにとりあえずの共通基盤を与えてはくれる。だがそれらはあくまで「とりあえず」であって、時代を命名するこれらの呼称はすべて、それ自体が検討されるべき一つの仮説にすぎない。「現代」のような一般的呼称ですら、本当にその語を発話するだけで、他から区別されるべき時代が存在するのか、つまり、たんに物理的に同一の時間に生きているだけで誰もが「現代」に属していると言えるのかは、きわめて疑わしいのである。

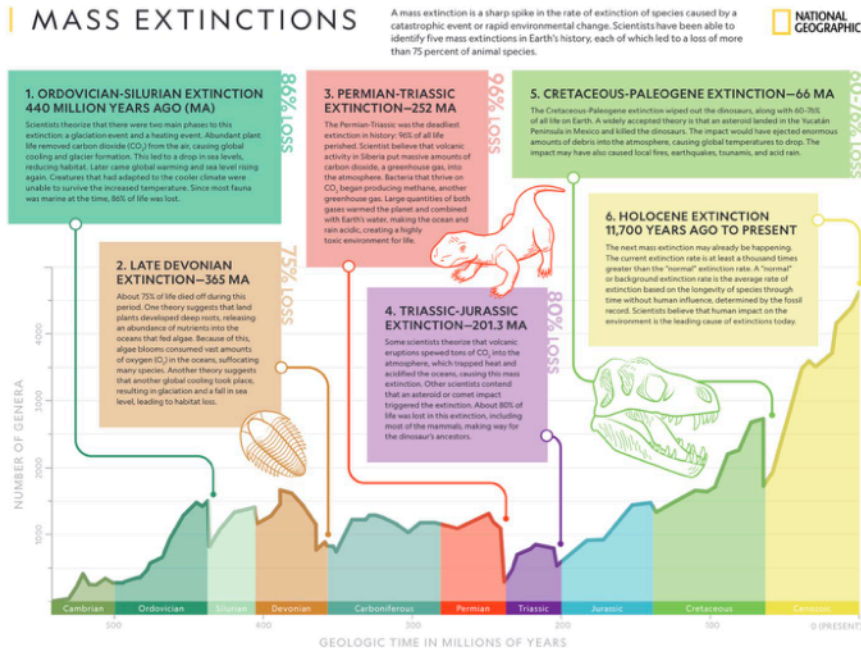
こうした観点から、本発表では「人新世」を事実としてではなく一個の記号として取り扱う。つまり「人新世」と名付けるべき新たな地質年代に、地球は本当に突入しているのか、人類の文明活動が本当に地球の平均気温や気候変動に重大な影響を与えているのかといった問題はカッコに入れて、むしろ「人新世」を語ることで私たちはどのような思考や世界観へと導かれるのかという問い、「人新世」という記号の機能について考えてみたいのである。

このような言い方をすると、環境破壊や気候変動、地球温暖化が容赦なく進行している「現代」に生きながら、哲学者が何を悠長なことを言っているのか、と非難されることもある。この非難はしばしば、人類共通の課題解決にコミットしない、つまり「役に立たない」(記号論も含む)人文学一般への非難と結びつくこともある。しかしながら、こうした非難を正当化しているものこそ、「気候変動」「地球温暖化」

「SDGs」等々の諸記号がもたらす、言説上の効果にほかならないのである。「人新世」とは、それら一連の記号群を、より大きなスケールにおいて基礎付けるものだと言えるだろう。人類がこれまでの文明活動において高々数世紀、長くとも一万年程度において経験してきたことが、数億年という地質学的時間スケールに關与するかのような見掛けを作り出すこと——それが「人新世」という記号の働きである。

## ●時空間と想像力

「人新世 Anthropocene」という語は、2000年に I G B P (International Geosphere Biosphere Program 地球圏・生物圏国際共同研究計画) のジャーナルにおいて、オランダ人大気化学者のパウル・クルツェンらが最初に提唱した言葉である。それは地質年代における新生代第四紀(約260万年前から現在まで)中の第二世である完新世(Holocene 約一万年前から現在まで。かつては沖積世 Alluvium と呼ばれていた)に置き換わる表現として提案された。古生代や中生代における区分は生物の大量絶滅(オルドビス紀末(O-S境界)、デボン紀末(F-F境界)、ペルム紀末(P-T境界)、三畳紀末(T-J境界)、白亜紀末(K-Pg境界))によって印づけられる。



それに対して新生代第四紀は、そもそも人類の登場によって特徴づけられている。完新世は直近の氷期が終わる約一万年前に始まり、人類の文明活動とほぼ重なっている。産業革命以降、文明活動が生物種の新たな大量絶滅をもたらしているという指摘は以前から存在したが、「人新世」はその認識に明確な名前を与え、地球史の中に位置づけようとするものだといえる。

地質時代の命名は、自然科学であるから客観的・中立的な基準に基づいて行われてきたかということ、決してそうではない。土壌を基準に区分していた「沖積世」という名称は、ノアの洪水によって運ばれた堆積物の世界という意味であるが、それは特定の神話(ユダヤ・キリスト教)に拠るがゆえに好ましくないという理由から1948年に、化石に基づく「完新世」という名称に変更された(日本ではその後もしばらく沖積世が使われた)。「人新世」とはこの時期を、人類の文明活動による地球環境の変化という観点を導入して再定義する名称である。だがいずれにしても、そこでは一万年という、地球の歴史においてはほんの一瞬に等しい時間しか経過しておらず、「人新世」は存在するとしてもまだ始まったばかりということになる。逆に言えば、「人新世」が地質時代の名称として成立するには、人類文明の地球への影響が今後少なくとも数万年、あるいは数十万年継続すると想定しなければならない。(皆さんはこれをどうお考えになるだろうか。私は冷静にみて、ありそうもない宗教的信念だと感じる。)

こうした問題の背景には、時間や空間のスケールに関する人間の直観能力、つまり想像力の限界があるように思われる。私たちは実在の宇宙における距離や時間を、もっと自分に馴染みのあるサイズ、想像可能なスケールに変更してイメージする傾向があるのである。地球は太陽の周りを回ると誰でも知っているが、その実際の距離の比は、科学の本に載っている図解のそれとは似ても似つかない。太陽は直径140万キロ、地球のそれは13,000キロであり、両者の距離は一億五千万キロである。仮に太陽が直径35センチのスイカだとすると、地球はそこから38メートル離れた所に浮かんでいるブルーベリーである。マイクロなサイズについても同様である。ウィルスの大きさは100ナノメートル、それを含む呼気のエアロゾルの直径は0.1から1マ

マイクロメートルであり、不織布マスクの繊維の間隔は5マイクロメートルだから、ウィルスが蚊だとするとエアロゾルは蚊が入ったシャボン玉、それに対してマスクは木と木の間隔が30センチある竹藪のようなものである。

時間的スケールの場合にはさらに極端である。地球科学の学部講義でよく紹介されるいわゆる「地球カレンダー」（地球の誕生した瞬間を元旦の午前0時としそこから現在まで経過した46億年を一年に換算する）においては、白亜紀末の隕石衝突と恐竜の絶滅（K-Pg境界）はクリスマス頃、最初の人類の出現（約700万年前）が大晦日の午前10時頃であり、私たちの直接の祖先である現生人類（ホモサピエンス）の誕生（約20万年前）は、およそ除夜の鐘が撞き始められる午後11時37分、そして「人新世」は、もしもその始まりを農耕牧畜の開始（約一万年）とみるなら11時59分ちょうどくらい、もしも産業革命による二酸化炭素の大量排出以後とみるなら、11時59分58秒である。つまり「人新世」と言われている新たな地質時代とは、一年間の地球史においてどんなに早くても一分前、遅ければ二秒前に始まった現象だということである。

私が注意を促したいのは、こうした圧倒的な時間スケールの中に「人新世」という記号を置いてみた場合、それがどんな風に見えるかということである。それがまったくの虚偽であると言いたいわけではない。そうではなく、人新世という表象は、人間の感性、つまり直観的把握能力を越えた量を人間的なスケールに翻訳する（圧縮する？ カント美学の言う「崇高」）結果、初めて得られる、高度に人為的な表象だということ強調したい。私たちは宇宙の姿をありのままに直観できないので、それを自分の想像力に見合ったスケールに変換せざるをえない。それはある意味では誤謬であり虚偽なのであるが、それは正しい知識を得れば訂正されるような単純な虚偽ではなく、私たち自身の認識能力の限界に由来するものなのである。

スピノザは『エチカ』第二部の定理35において「虚偽とは、十分でないあるいは損なわれた、混乱した観念が含む欠乏のことである *Falsitas consistit in cognitionis privatione, quam ideale inadiquatae, sine multinatae et confusae, involvunt.*」と述べ、同じ章の「注解」において太陽の距離を例に挙げている。

Sic cum solem intuemur, eum ducentos circiter pedes a nobis distare imaginamur, qui error in hac sola imaginatione non consistit; sed in eo, quod dum ipsum sic imaginamur, veram ejus distantiam et hujus imaginationis causam ignoramus. Nam tamesti postea cognoscamus eundem ultra 600 terrae diametros a nobis distare, ipsum nihilominus prope adesse imaginabimur; ...

Spinoza, *Ethica* Pars II, Prop XXXV 'Falsitas consistit in cognitionis privatione, quam ideale inadiquatae, sine multinatae et confusae, involvunt.', Scholium.

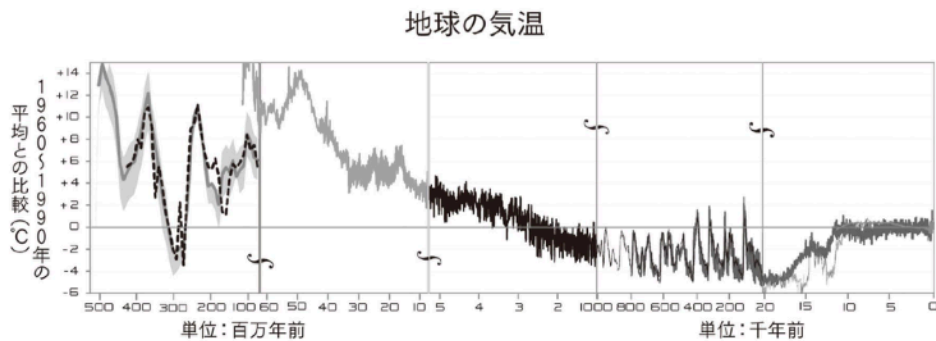
太陽を見ると我々は、太陽が我々から200フィート（60m）ほど離れたところにあるかのように想像する。この誤りは想像そのものの内ではなく、むしろ我々が太陽を想像する際、その真の距離とこの想像の原因を知らないことから来る。なぜなら、のちに太陽が地球の直径の600倍以上も我々から離れていると認識しても、我々は太陽を近くにあるものとして想像するだろうから。

スピノザ『エチカ』第二部 定理35「虚偽とは、十分でないあるいは損なわれた、混乱した観念が含む欠乏のことである」注解

太陽までの実際の距離は、より適切には地球直径の600倍以上というよりは12500倍なのであるが、それはここで重要ではない。重要なことは、我々は自然界の時間や空間の大きさについてたとえ正しい知識を持っていたとしても、その事象を表象する想像力、イメージは依然として誤り続けるということである。その誤りの原因は、私たちが対象に関して無知であるからではなく、自分自身（の能力の限界）に対して無知であり、そのために「混乱した観念」を持つからだ、ということだ。スピノザ的に言うなら「人新世」とはそうした「混乱した観念」のひとつであり、その核心にあるのは、人間的あまりに人間的なもの、いわば宇宙の擬人化である。人新世とは地質的時間の人間化なのである。このことは皮肉にも、「人新世」やそれに従う様々な環境主義的言説が、表層的には人間中心主義からの脱却を謳っていることと、まったく裏腹である。

### ●「裁きの日は近い」

オバマ大統領時代に米国エネルギー省科学担当次官を務めたスティーブン・E・クーニン（ニューヨーク大学教授）は、政治的言説やマスメディアにおいて語られる気候変動や地球温暖化についてのイメージが、本来の科学的認識からかけ離れ、ねじ曲げられたものであることを指摘している。気候変動や地球温暖化については、トランプ元大統領の支持者たちに代表されるように、それらはすべてデマ、陰謀であると断定する反対勢力があるが、クーニンの立場がそのような、政治的に動機づけられたアンチ環境主義でないことは、彼の経歴からして明白である。クーニンによれば、地球温暖化について考える際にも、時間的なスケールに関するイメージ操作がもたらす影響は大きな役割をになっており、その結果、それが政治的に利用されているという。



図表1-8 | 5億年前までの5つの時代区分について、地質学的手法で計測した地球の平均地上気温偏差

スティーヴン・E・クーニン『気候変動の真実 科学は何を語り、何を語っていないのか?』  
三木俊哉訳、日経BP、2022年、(Kindle版) p.68

たとえばこの図は過去五億年の地表温度の変化を示すものであるが、これを見る時に重要なのは地質学的境界で区分される各フェーズの時間スケールが異なっていることである。直近の二万年を基準にするならば、一つ右のグラフは横に五十倍、中央のは250倍、次のものは2500倍、いちばん左のものは二万倍以上引き伸ばして考える必要がある。つまりこのグラフは本来の時間的比率に従えば横幅が数キロに及ぶものと想像しなければならない。これが、自然界を正當に表象するために必要な空間比率のイメージである。だが多くのグラフは、パワーポ等を使ってプレゼンするため、4:3あるいは16:9のような縦横比に合うように数値の取り方が調整される。こうしたフレーム比率は便宜上のものだと思われるかもしれないが、これこそが人間の表象能力の限界を明白に示す徴である。いわばパワーポ的な表象形式こそ、世界の人間化そのものなのだ。

先ほどの地球カレンダーをさらに進めるなら、元旦の午前10時頃（約500万年後）には次の氷河期がピークに達し、種の大量絶滅が起こることが予想される。その時点が、おそらくは本当に次の地質年代を境界づけるポイントになるのだろう。その時、種としてのホモサピエンスは既に遙か以前に（午前1時か2時＝10万～20万年後）絶滅しているだろうし、私たちの文明はそれよりもだいぶ前に（おそらくは新年が始まって数分以内＝数万年以内）終息し、近代科学文明はさらに早く（その不安定性からしておそらく数秒以内＝数百年以内）に終わっていると想像するのが、妥当な想像ではないだろうか。

「人新世」は、こうした不可避の終末を先取りしてそれを時間的に圧縮し、それに人間自身の所業（温室効果ガスの排出等）による罰という宗教的意味を付加するものとして理解できる。有限な人間を無限の宇宙の中に強引に意味づけるという意味で、それは口マン主義的な観念であるとも言えるし、また「裁きの日は近い」というユダヤ＝キリスト教的な「語り」《ナラティブ》にも接近してくる。「終末」をめぐる語りは、人々を大規模に扇動するものとしてこれまでも常に用いられてきた。科学という装いを纏ってはいても、環境危機を感情的に煽る言説はその根底において、世界の終末と救世主による復活を唱える宗教的な説法と、その語りにおいてはほぼ同型である。こうした現代化された説法のマスメディアにおける威力は絶大であ

り、脱炭素や再生エネルギーへの転換といった特定の政治的目標に向けて、多くの人々を誘導することが可能となる。

人類文明の環境への影響を考えるにしても、こうした感情的な扇動に抵抗し、理性を保つにはどうすればいいのだろうか。私はスピノザ（とカント）に倣って、人間的認識が限界づけられていることを自覚するしかないと考える。つまり地球の限界ではなく、人間の限界を知ること——それが真の意味でポスト人間主義的な未来に生きるために必要なことではないだろうか、と考えているのである。



Gerhard Richter, *Sils Maria*, 2003, 82 cm x 122 cm, Oil on canvas

最後にゲルハルト・リヒターがその作品「Waldhaus」に付したコメントを参照して結論としたい。かつてニーチェが晩年を過ごしたシルス＝マリアを描いたこの作品について、彼は次のようなコメントを記した。（正確ではないが）我々は自然の風景を前にして、美や崇高、郷愁など自分の感情をそこに投影して想いに耽るが、当の自然は人間のことなど何ひとつ考慮していないのである。

Paul J. Crutzen, *A Pioneer on Atmospheric Chemistry and Climate Change in the Anthropocene* (SpringerBriefs on Pioneers in Science and Practice Book 50) (English Edition) 1st ed. 2016.

齊藤幸平『人新世の資本論』集英社、2020年

スピノザ『エティカ』工藤喜作・斎藤博訳、中央公論社、2007年

スティーヴン・E・クーニン『気候変動の真実 科学は何を語り、何を語っていないのか?』三木俊哉訳、日経B P、2022年

---

#### コメント用 QRコード

・ご質問、ご感想などがあれば、QRコードからアクセスして、ご記入ください。

<https://forms.gle/X7vcXNmajRkG2TXL9>

